日本語と韓国語の複合動詞の相違点

-塚本(2009)の相違点の批判的な検討-

李 忠 奎*

(e-mail ： ch4229@hanmail.net)

目　次

1. はじめに
2. 塚本(2009)の相違点
3. 塚本(2009)の相違点の批判的な検討
4. 本稿における日韓語の複合動詞の相違点
5. まとめ

1. はじめに

李(2012)は、塚本(2009)が指摘した日韓語の複合動詞の類似点について批判的な立場から検討し、その結果として、以下のような四つの類似点を提示した。

(1)a. 両言語の複合動詞は、V1の形式を「動詞語幹」という概念を適用し、「動詞語幹＋動詞」「動詞語幹＋介在要素＋動詞」のように分析することができる。但し、日本語の一部の場合において「i」母音に関する付加条件を必要とする。

b. 両言語の複合動詞には「介在要素無しタイプ」と「介在要素有りタイプ」の二種類がある。

c. 両言語ともに「v－V」タイプの複合動詞が存在する[1)]。

＊ 西原大学校、助教授、対照言語学

1) ここで言う「v－V」タイプとは、寺村(1984)の分類の一つである。同氏は、動詞の自立語としての意味が保持されているかどうかという観点から、日本語の複合動詞を①自立動詞(V)＋自立動詞(V)、②自立動詞(V)＋付属動詞(v)、③付属動詞(v)＋自立動詞(V)、④付属動詞(v)＋付属動詞(v)のように四つに分類している。

www.kci.go.kr

d.　両言語ともに所謂「並列」複合動詞と呼ばれるものが存在する。

この四つの類似点は、塚本(2009)の四つの類似点と同一の観点から対照できるように意図的に示したものであり、従って、両言語間に見られる複合動詞の類似点は、(1)で提示されていないものも有り得る。

引き続き本稿では、塚本(2009)が指摘した日韓語の複合動詞の相違点に焦点を当てて検討する。具体的には、(1)の類似点も参照しながら、塚本(2009)の相違点について同意すべきところは同意し、首肯しかねるところは批判的な分析を加え、最終的には本稿における両言語の複合動詞の相違点を新たに提示する。

2.　塚本(2009)の相違点

本節では、塚本(2009)が指摘した両言語の複合動詞の相違点を簡略に整理する。

両言語間における相違点の一つ目は、語構成に関するものとして、日本語では、寺村(1984)によるその四分類のうち、(2)のようなV2が自立性を失った複合動詞を比較的多く見出すことができるのに対して、韓国語にはV2が自立性を失った複合動詞が非常に少ない、という点である。

(2)　～出す、～かける、～かかる、～込む、～上がる、～上げる、～立てる、
～立つ、～つける、～つく、～返す、～返る、～回す、～過ぎる、～合う、
～通す、～抜く、～切る、～尽くす、～直す、～損なう、～うる、…

塚本(2009：324～325)は、こういったことが一つの原因で、日本語には複合動詞全体の数と種類が豊富であるのに対して、韓国語には複合動詞全体の数と種類が限られていると主張している。

相違点の二つ目は、(3)から確認できるように、日本語では「鳴り終わる」という統語的複合動詞を用いて表現することができる場合に、韓国語では複合動詞として成立することが認められない、ということである。

(3)a.　ベルが鳴り終わった。
b.　종소리가 끝났다.

相違点の三つ目は、意味的な側面から見た場合、日本語ではV2が様態を表す複合

www.kci.go.kr

動詞を数多く見出すことができるのに対して、韓国語ではそういった複合動詞はなくはないが、非常に限られている、ということである。日本語の「食べ過ぎる」「出し間違える」「殴り合う」が韓国語ではそれぞれ「지나치게 먹다」「잘못 내다」「서로 때리다」のように「副詞＋動詞」の形式で表現され、複合動詞としては成り立たない、ということが三つ目の相違点の具体例として挙げられている。

相違点の四つ目は、形態・統語的な側面に関するものとして、韓国語における「統語的複合動詞」が日本語においては塚本(2009)が定義している複合動詞ではなく、「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式に対応して表現される、ということである。塚本(2009：329～330)は、例えば、「앉아 있다」「만들어 놓다」「사 주다」を韓国語の「統語的複合動詞」として認めた上で、これらをそれぞれ「座っている」「作っておく」「買ってやる」と対応させ、その形態構造の違いを指摘している。

相違点の五つ目は、これもやはり形態・統語的な側面に関するものとして、韓国語で複合動詞を用いて表現することができる場合に、日本語では塚本(2009)が定義した複合動詞としては成立せず、「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式で表現する必要があるものがかなりの割合で見受けられる、ということである。同氏はその具体例として韓国語の「구워먹다」を「複合動詞」と断言した上で、日本語では韓国語の場合と同じ形式である「*焼き食べる」ではなく、「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」の形式である「焼いて食べる」のように表現しなければならないと指摘している。

相違点の六つ目は、(4)から分かるように、両言語ともに複合動詞としては成立するが、V1とV2が両言語でちょうど逆の順序になっている複合動詞が存在する、ということである。

(4)a. 学生はdをbに｛書き直した/*直し書いた｝
b. 학생은 d를 b로｛고쳐 썼다/*써 고쳤다｝

最後に相違点の七つ目は、韓国語では語彙的意味が類似した動詞がV1とV2に入っている複合動詞が比較的に見出されるのに対して、日本語ではそういった複合動詞がなくはないが、非常に限られているといった意味的な側面に関するものである。氏は関連する例として、韓国語の「동여매다」とそれに対応する日本語の「縛る」を挙げている。

以上、塚本(2009)は両言語の複合動詞の間に見られる相違点として、上記の七点を指摘している。

www.kci.go.kr

3. 塚本(2009)の相違点の批判的な検討

前節では塚本(2009)の七つの相違点について概観した。本節では各々の相違点を批判的な立場から検討する。

3.1. 「V－v」タイプの複合動詞

塚本(2009)の相違点の一つ目は、寺村(1984)の「V－v」タイプに該当する複合動詞が日本語には比較的多いが、韓国語には非常に少ないということである。そして、同氏は、こういったことが一つの原因で、日本語には複合動詞全体の数と種類が豊富であるのに対して、韓国語には複合動詞全体の数と種類が限られていると指摘している。

この相違点は、韓国語に比べて、日本語には、例えば「降り出す、動き出す」「耐え抜く、走り抜く」「困り切る、逃げ切る」「飲み過ぎる、食べ過ぎる」のような、V2が所謂「文法化(grammaticalisation)」が生じていると分析可能な複合動詞が比較的多いこと、また、これらのV2は高生産性を誇るため、結果として日本語の複合動詞が数多くなることを指摘したものであり、まさにその通りであると言える。ただ、塚本(2009)における両言語の複合動詞は、以下の表から分かるように「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定されているので、日本語の「V－v」タイプの複合動詞は本稿の「介在要素無しタイプ」に該当し、韓国語の「V－v」タイプの複合動詞は本稿の「介在要素有りタイプ」に該当する、ということだけは確認しておきたい。つまり、本稿の立場からすると、塚本(2009)が言う両言語の「V－v」タイプの複合動詞は、同一の形態構造を有するものではない、ということになる。

【表1】塚本(2009)と本稿における日韓語の複合動詞の形態構造

	塚本(2009)の複合動詞	本稿の複合動詞
J	動詞連用形＋動詞（押し倒す）	動詞語幹＋動詞(但)（押し倒す）
	－	動詞語幹＋介在要素＋動詞(但)（見て取る）
K	－	動詞語幹＋動詞（오가다）
	動詞連用形＋動詞（즐겨먹다）	動詞語幹＋介在要素＋動詞（알아보다）

注：「－」は塚本(2009)では言及されていないことを意味し、(但)は「-i」母音に関する付加条件を意味する。当該の母音に関しては4.1でまた言及する。

3.2. 対応関係のずれ

塚本(2009)の二つ目の相違点は、日本語の統語的複合動詞を用いて表現することができる場合に、韓国語では複合動詞として成立することが認められない、ということである。

www.kci.go.kr

日本語の統語的複合動詞は、具体的には影山(1993)が挙げた以下のようなものを指すが、これらの複合動詞が韓国語では同一の「動詞＋動詞」型の複合動詞として実現せず、対応関係においてずれが生じる、という指摘である。

(5) ～合う、～飽きる、～あぐねる、～誤る、～得る、～終える、～遅れる、～終わる、～掛ける、～兼ねる、～切る、～過ぎる、～損なう、～そびれる、～損じる、～出す、～尽くす、～付ける、～続ける、～通す、～直す、～慣れる、～抜く、～残す、～始める、～まくる、～忘れる

確かに、日本語の統語的複合動詞は韓国語においては「動詞＋動詞」型の複合動詞が対応するのではなく、通常、(6a)のように「副詞＋動詞」型が対応するか、(6b)のように別の表現形式が対応する。

(6)a. 殴り合う(서로 때리다)、書き誤る(잘못 쓰다)、食べ終える(다 먹다)、読み終わる(다 읽다)、売り切る(다 팔다)、飲み過ぎる(너무 마시다)、言い損なう(잘못 말하다)、書き損じる(잘못 쓰다)、言い尽くす(전부 말하다)、行き付ける(늘 가다)、食べ続ける(계속 먹다)、見通す(끝까지 다 보다)、書き直す(다시 쓰다)、困り抜く(몹시 난처하다)、追いまくる(계속 쫓다)

b. 聞き飽きる(싫증이 나도록 듣다)、待ちあぐねる(기다리다 지치다)、あり得る(있을 수 있다)、乗り遅れる(늦어서 못 타다)、走り掛ける(달리기 시작하다)、決め兼ねる(결정하지 못하다)、言いそびれる(말할 기회를 놓치다)、降り出す(내리기 시작하다)、買い慣れる(사는 것에 익숙해져 있다)、言い残す(할 말을 남겨두다)、見始める(보기 시작하다)、聞き忘れる(들은 것을 잊다)

従って、日本語の統語的複合動詞に限定して対応関係を指摘するのであれば、塚本(2009)の二つ目の相違点は正しいと言える。ただ、生越(1984)が整理した(7)からも分かるように[2]、例えば、韓国語の「副詞＋動詞」型が対応する日本語の複合動詞には、(7a)の「～上げる、～返す、～こなす、～たりる、～違う、～違える、～間違う、～間違える」のようなものも有り、これらは日本語の語彙的複合動詞に属するものである、ということも併せて指摘すれば、両言語の複合動詞への理解度がより深まるだろう。

2) 生越(1984)は、日本語の複合動詞後項となる動詞のうち、日本語教育に重要だと思われる比較的生産性のある37語を取り上げ、韓国語(原文では「朝鮮語」)ではどのような対応関係を見せるのかを考察し、その結果を(7)のように整理した。ちなみに、同氏は、(7)の結果から、韓国語を母語とする日本語学習者に対して、副詞や副詞的な語句の指導を行うときには、特に(7a)のV2の用法に留意しつつ教える必要があると述べている。なお、(7)における下線は引用者によるもので、(5)にはないものを意味する。

www.kci.go.kr

(7)a. 韓国語では副詞・副詞的な語句が対応する場合
～合う、～上げる、～誤る、～終える、～終わる、～返す、～切る、～こなす、～過ぎる、～たりる、～違う、～違える、～尽くす、～間違う、～間違える、～つける、～続ける、～通す、～直す、～抜く、～まくる

b. 韓国語では副詞・副詞的な語句による以外の全く別な表現形式が対応する場合
～得る、～かかる、～かける、～兼ねる、～そびれる、～残す、～始める、～忘れる、～出す、～飽きる、～慣れる、～遅れる、～落とす、～損なう、～損ねる、～損じる（最後の五つの語は(7a)にも入り得る）

なお、次の塚本(2009)の三つ目の相違点は、意味的な側面から見た場合、日本語ではV2が様態を表す複合動詞が数多いのに対して、韓国語ではそういった複合動詞が非常に限られているということであるが、その例として挙げているのが「食べ過ぎる」「出し間違える」「殴り合う」「教え込む」のような例であり、これらは韓国語では「지나치게 먹다」「잘못 내다」「서로 때리다」「잘 가르치다」のように複合動詞としては成り立たないという指摘なので、結局、三つ目の相違点も「対応関係のずれ」に関するものに含めることができる。従って、三つ目の相違点に関してはこれ以上言及しない。

3.3. 形態構造の不一致

塚本(2009)の四つ目の相違点は、韓国語の統語的複合動詞が日本語では「動詞連用形＋動詞」ではなく、「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式に対応して表現される、ということである。

(8)a. ～있다, ～계시다, ～버리다, ～가다, ～오다, ～놓다, ～두다, ～보다, ～주다, ～드리다

b. ～ている、～ていらっしゃる、～てしまう、～ていく、～てくる、～ておく、～ておく、～てみる、～てやる、～て差し上げる

より具体的にみると、塚本(2009)は、(8a)のようなものを韓国語の統語的複合動詞と認めた上で、日本語においては(8b)のようなものとそれぞれ対照させている。「～」のところに、同氏が定義した「죽어/앉아」「死に/座り」のような「動詞連用形」が立つとの主張である。しかし、李(2012)においても指摘したことであるが、この相違点に関しては、少なくとも次のことについて再考する必要があると思われる。つまり、(8a)のようなものを韓国語の統語的複合動詞として認めているという点であるが、これは「対照研究はなるべく対等な立場で行うのが望ましい」という観点からすると、問題点として指摘することができる。もし、(8a)のような例を韓国語の統語的複合動詞として認めるのであれば、例えば、「입어 보

www.kci.go.kr

다」「着てみる」の例からも確認できるように、これらと形態的にも意味的にも1：1の対応関係を示す(8b)のような例も日本語の統語的複合動詞として認めるべきであり、それが妥当な分析方法であろう。しかし、塚本(2009)は「죽어/앉아/입어」「死に/座り/着」のような形態だけを「動詞連用形」と規定し、また、両言語の複合動詞を「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定したため、(8a)のようなものは複合動詞の範囲に含まれるが、(8b)のようなものは複合動詞の範囲から除外されるようになって、結果的に両者は形態構造が一致しないと分析されたのである。(8a)のような例は韓国語の文法において「補助動詞結合」として扱われる場合が多いこと、同様に(8b)のような例も日本語の文法において「補助動詞結合」として扱われる場合が多いこと、さらに「먹고는 있다/먹고만 있다」「食べてはいる/食べてばかりいる」のような統語的なテストの一致可否なども総合して考えると、やはり、(8a)と(8b)は同じ形態構造を有するものとして同一に扱うのが妥当であると思われる。ちなみに、両者を同一に扱うためには、V1に「動詞語幹」という概念を適用して分析するのが一つの方法であり、このことについては既に李(2009、2010a、2010b)などで一貫して主張したので、ここでは再び繰り返すことをしない。

3.4. 複合動詞の認定

塚本(2009)の五つ目の相違点は、例えば、「구워먹다/*焼き食べる/焼いて食べる」の成立可否から分かるように、韓国語で複合動詞を用いて表現することができる場合に、日本語では「動詞連用形＋動詞」の形式ではなく、「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式で表現する必要があるものがかなりの割合で見受けられる、ということである。塚本(2009)の説明によると、以下のようなものが該当する例として挙げられる。

(9)a. 지져먹다, 끓여마시다, 만들어팔다, 골라쓰다, …
b. *煮食べる、*沸かし飲む、*作り売る、*選び使う、…
c. 煮て食べる、沸かして飲む、作って売る、選んで使う、…

(9a)の例を韓国語の複合動詞と認定するという前提では、この指摘は問題なく、正しいと言うことができる。しかし、当該の例を1語である複合動詞として扱うことについては、以下のような点で問題があると指摘せざるを得ない。この点、李(2012)においても指摘したことであるが、(9a)の例は以下の統語的操作から分かるように、境界部を分離することができるという特徴を有する。

(10)a. 지져서 먹다, 끓여서 마시다, 만들어서 팔다, 골라서 쓰다, …
b. 지져서 다같이 먹다, 끓여서 안전하게 마시다, 만들어서 몰래 팔다, 골라서 맘껏 쓰다, …

www.kci.go.kr

即ち、(10a)の場合は、韓国語の複合動詞の内部には介入しないとされる｛－서｝が入っており[3]、(10b)の場合は、さらに、副詞のように機能する要素まで入っている。複合動詞は一つの「語」であり、原則として、語には(10)のような境界部の分離を許容しないため、やはり、(9a)のような例を複合動詞と認定することには問題がある。(8)の場合と同様に、もし、(9a)のような例を韓国語の複合動詞として認めるのであれば、それらと形態的にも意味的にも対応する(9c)のような例も日本語の複合動詞として認めるべきである。結論的に、塚本(2009)は、両言語の複合動詞を「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定したこと、また、同構造を有するものの中に複合動詞としては認めにくいものも存在するということを検討しなかったことに最大の問題があると言えよう。

3.5. 逆順の対応関係のもの

塚本(2009)の六つ目の相違点は、「書き直す/고쳐 쓰다」「着替える/바꿔 입다, 갈아입다[4]」「聞き流す/흘려듣다」の例から確認できるように、両言語ともに複合動詞としては成立するが、V1とV2が両言語でちょうど逆の順序になっている複合動詞が存在する、といった語構成に関するものである。

この相違点は、以下のような例と同様に説明できる一つの事例として、動詞の例を挙げたものである。日本語の「AB」の構成が韓国語では「BA」の構成になるという、対応関係においては逆順になることを指摘したものであり、これらは日本語教育または韓国語教育の現場では注意を要するものなので、この相違点は重要であると言える。

(11)a. 良妻賢母 ⇔ 현모양처(賢母良妻)
b. 古今東西 ⇔ 동서고금(東西古今)
c. あれこれ/あちこち ⇔ 이것저것(これあれ)/여기저기(こちあち)
d. 行ったり来たりする ⇔ 왔다 갔다 한다(来たり行ったりする)

但し、上述した通り、「고쳐 쓰다、바꿔 입다」の場合、「고쳐<u>서</u> 쓰다, 고쳐서 <u>새로</u> 쓰다」「바꿔<u>서</u> 입다, 바꿔서 <u>새것으로</u> 입다」のように、境界部を分離することが可能なので、こういった特徴を有するものを1語である複合動詞として認めていいのか、ということは問題になる。

3.6. 「並列」複合動詞

塚本(2009)の七つ目の相違点は、例えば「동여매다/縛る」のように、韓国語では語

3) 김석득(1992)、김창섭(1981、1996)、서정수(1992)、이관규(2002)、최현배(1961)などを参照されたい。
4) 分かち書きは原文のままであり、他の例についても同様である。全体的に言うと、塚本(2009)は分かち書きに一貫性が見られない。

www.kci.go.kr

彙的意味が類似した動詞がV1とV2に入っている複合動詞が比較的に見出されるのに対して、日本語ではそういった複合動詞がなくはないが、非常に限られているといった意味的な側面に関するものである。

確かに、両言語には類義語同士の複合動詞が存在し、以下のようなものがその具体例として挙げられる。なお、(12)は李(2012)から引用したものであるが、(12a)と(12b)の斜線の左側は、本稿で言う「介在要素無しタイプ」の複合動詞であり、(12b)の斜線の右側は、本稿で言う「介在要素有りタイプ」の複合動詞である。

(12)a. 忌み嫌う、選りすぐる、驚き呆れる、思い描く、消え失せる、消え去る、書き記す、恋い慕う、乞い願う、媚びへつらう、堪え忍ぶ、抱き抱える、矯め直す、照り輝く、照り映える、問い尋ねる、解きほぐす、嘆き悲しむ、並べ連ねる、慣れ親しむ、煮え滾る、降り注ぐ、光り輝く、秘し隠す、放り投げる、褒め称える、曲がりくねる、貰い受ける

b. 굶주리다 / 움켜잡다, 움켜쥐다, 깨부수다, 동여매다, 후려갈기다, 후려치다

これらは一般に「並列」複合動詞と呼ばれるものであるが、日本語においても少なくない例が存在することが確認できる。類義語についてより厳密に定義し、また、複合動詞についてもより厳格な基準で判別するのであれば、「並列」複合動詞は韓国語より日本語の方により多いと言えるのではないだろうか。もっとも、複合動詞の全体の数からすると、「並列」複合動詞は両言語ともに非常に少ない方なので、当該の複合動詞がどちらの方に多いのかという指摘は大きな意味はない。両言語の「並列」複合動詞に関しては、対義語同士の結合が「動詞＋動詞」型の複合動詞として実現するか否か、という点がより重要であるが、この点に関しては次節で言及することにする。

以上、本節では、塚本(2009)が指摘した七つの相違点について批判的な立場から検討を行った。次節では、塚本(2009)の相違点とは異なる本稿における両言語の複合動詞の相違点を新たに提示する。

4. 本稿における日韓語の複合動詞の相違点

李(2010b)は、日韓語の動詞結合がどのように形成され、どのように分類されるのかについて考察し、その結論として、両言語の動詞結合の形成過程と分類は大まかには同一であると考えてよい、と指摘した。しかし、細かいところではやはり両言語間で異なる点も見られる。以下、その内容を参考にしつつ、本稿における日韓語の複合動詞の相違点を提示する。

www.kci.go.kr

4.1. 日本語における母音「－i」の存在

塚本(2009)は、両言語の複合動詞を「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定しているが、本稿では塚本(2009)が扱っていない「見て取る、やって来る、…」「오가다，날뛰다，…」のようなものも含めるよう、「動詞語幹」という概念を適用し、両言語の複合動詞の形態構造を以下のように分析する。但し、この分析は、日本語の一部の場合に限って、母音「－i」に関する付加条件を要する。(13a)が「介在要素無しタイプ」の複合動詞であり、(13b)が「介在要素有りタイプ」の複合動詞である。

(13)a. 動詞語幹＋動詞
例）食べ終わる、押し倒す、… / 오가다, 날뛰다, …
b. 動詞語幹＋介在要素＋動詞
例）見て取る、やって来る、… / 알아보다, 주고받다, 돌아다보다, …

V1を「動詞連用形」ではなく、「動詞語幹」と分析しようとする本稿においては、日本語の子音語幹動詞がV1に立つ場合だけ見られる母音「－i」の存在が一つ目の相違点になる(「押し倒す(動詞語幹os＋i＋動詞taosu)」)。なぜなら、韓国語においては、子音語幹動詞がV1に立つ場合でも必要とする母音が存在しないからである5)。当該の母音は、塚本(2009)のように「動詞連用形」を用いる分析では全く登場しないので、塚本(2009)の分析を支持する側から見れば、余計なものと思われるかもしれない。しかしながら、本稿は、両言語の複合動詞を「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定することには同意せず、塚本(2009)の分析から抜けているものも含めて扱うべきである、という考えから「動詞語幹」を適用しており、V1を「動詞語幹」という概念で分析する本稿では、日本語の一部の場合にのみ登場する母音「－i」の存在が両言語間の一つ目の相違点になるのである。

4.2. 介在要素の数

本稿における二つ目の相違点は、両言語間で複合動詞の形成に介在する要素が数の違いを見せるということである。日本語では｛－て｝が介在し、韓国語では｛－어/－고/－어다｝が介在するので、1対3の相違があることになる。それぞれの異形態、即ち、日本語の｛－で｝と韓国語の｛－아/－여｝｛－아다｝も入れて数えると、2対6になる。塚本(2009)は、両言語の複合動詞を「動詞連用形＋動詞」の構造を有するものに限定して分析を行ったため、日本語の「やって来る、食って掛かる」のような｛－て｝が介在

5) 韓国語の「먹으러 갔다, 참으려 했다」などに見られる語幹直後の「으」母音が日本語の「i」母音と似たような機能をするが、両者を1：1で対応させることは困難である。より詳しいことについては李(2010a：40～41)を参照されたい。

www.kci.go.kr

するもの、韓国語の「(가끔씩 메일을)주고받다, (매일같이)놀고먹다」のような {－고} が介在するもの、「넘어다보다, 돌아다보다」のような {－어다} が介在するものが言及されなかったが、これらも各々一つの複合動詞と見て遜色のないものであり、日韓語の複合動詞に関する対照研究を行う際は、研究目的上、考察範囲を特別に限定しない限り、これらの例も一括して扱うべきである。そして、当該の例も入れてより総合的な観点から対照を行うことになると、介在要素間の相互関係も明らかにする必要があるので、二つ目の相違点として、介在要素について言及することは決して意味のないことではないだろう。ただ、当該の相違点は数の違いだけを指摘したものなので、相違点としてはごく単純なものに過ぎない。

4.3. 複合動詞の分布の違い

本稿における三つ目の相違点は、日本語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して、韓国語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素有りタイプ」の形で形成されるので、数という面で分布上における相違が見られるという点である。正確な数を示すことはできないが、その概略を示すと、以下の表のようにまとめることができる。

【表2】日韓語の複合動詞の分布の違い

	日本語の複合動詞	韓国語の複合動詞
介在要素有りタイプ	少ない（やって来る、食って掛かる）	かなり多い（알아보다, 주고받다）
介在要素無しタイプ	圧倒的に多い（泣き叫ぶ、飲み歩く）	極めて少ない（오가다, 무르익다）

本稿の立場からすると、塚本(2009)は、日本語の「介在要素無しタイプ」の複合動詞と韓国語の「介在要素有りタイプ」の複合動詞を扱っているので、結果的には両言語間で数のより多い複合動詞同士を対照したことになる。これも一つの分析方法としては成り立つだろうが、日本語の「介在要素有りタイプ」の複合動詞と韓国語の「介在要素無しタイプ」の複合動詞については全く言及しなかったため、日韓語の複合動詞を包括した分析であるとは到底言えない。なお、この三つ目の相違点によって当然の結果のように生じる違い、そして、当該の相違点が生じる根本的な原因については、李(2010b)と李(2011)で言及しているので参照されたい。

4.4. 対義語同士の「並列」複合動詞

本稿における四つ目の相違点は、対義語同士の結合が韓国語では「V＋V」型の複合動詞として実現されるのに対して、日本語では「N＋N」型の複合名詞として実現される

www.kci.go.kr

という点である。(14)に幾つかの例を挙げて確認する。

(14)a. 오가다, 여닫다, 사고팔다, 주고받다, …
b. 行き来、開け閉め、売り買い、やり取り、…
c. *行き来る、*開け閉める、*売り買う、*やり取る、…

日本語の場合は、対義語同士の結合が品詞としては名詞になるので、動詞としての機能を確保するためには、軽動詞「する」の助けを借りて、(15a)のようにする必要がある。

(15)a. 行き来する、開け閉めする、売り買いする、やり取りする、…
b. ?오가기 하다, ?여닫기 하다, ?사고팔기 하다, ?주고받기 하다, …

一方、韓国語の場合、通常、(15b)のようには言わないのは「より単純な形式で表すべき意味が実現するとき、より複雑な形式で表すことはできない。但し、相応の理由や効果がある場合には阻止は除外され得る」という語彙の阻止(lexical blocking)によって適切に説明することができる。つまり、(14a)の「오가다/여닫다」という単純な形式が(15b)の「오가기 하다/여닫기 하다」というより複雑な形式を阻止するのである。なお、対義語同士の結合に関するより詳しいことについては、李(2008)を参照されたい。

4.5. 「を」と「을(를)」による境界部の分離可能性

本稿における五つ目の相違点は、日本語の「を」は複合動詞の境界部を分離することができないのに対して、それに対応する韓国語の「을(를)」は複合動詞の境界部を分離することが可能な場合がある、ということである。当該の要素による境界部の分離可能性をタイプ別に示すと、以下の通りである。

【表3】「を」と「을(를)」による境界部の分離可能性

	日本語の複合動詞	韓国語の複合動詞
介在要素無しタイプ	できない	できない
介在要素有りタイプ	できない	できる場合がある

具体例を見ながら確認しよう。まず、介在要素無しタイプの場合は、日韓語ともに「を」と「을(를)」による境界部の分離を許容しない。

(16)a. *押しを倒す(押し倒す)、*叩きを込む(叩き込む)、*食べを始める(食べ始める)
b. *오를 가다(오가다), *날을 뛰다(날뛰다), *오르를 내리다(오르내리다)

www.kci.go.kr

介在要素有りタイプの場合は、日本語は「を」による境界部の分離を許容しないが、韓国語は「을(를)」による境界部の分離を許容する場合がある。

(17) *打ってを出る(打って出る)、*見てを取る(見て取る)、*やってを来る(やって来る)

(18)a. 신호 대기 중 신평에서 비가 얼마나 쏟아붓는지 앞이 안 보여요. (중략) 비가 비가 그렇게 쏟아를 붓더이다.

b. 말을 하면 잘 알아를 듣든가, 못 알아들으면 그냥 가만히 있든가.

c. 내가 소리 안 지르게 생겼어? 사람이 출근을 하면 쳐다를 보고, 사람이 말을 하면 대꾸를 해야할 것 아냐?

(18)はインターネットでゲットしたものであるが、「介在要素有りタイプ」の複合動詞として全く問題がないと判断される「쏟아붓다/알아듣다/쳐다보다」が「를」による境界部の分離を許している。また、(19)の場合は、詩人김종태の「문」という詩から引用したものであるが、「집어가다/훔쳐가다/빌려가다」における境界部が(18)と同じように「를」によって分離されている。

(19) 자네에게 특별히 부탁 하나 함세. 가끔씩 아주 굳게 닫아버리는 자네의 마음. 그거 별거 아니니 대충 열어놓게. 누가 집어를 가나 훔쳐를 가나 빌려를 가나. 맘문이 열려야 세상을 보지.

(18)の「쏟아붓다/알아듣다/쳐다보다」に比べて、(19)の「집어가다/훔쳐가다/빌려가다」の場合は、V2に「가다」という同一の動詞が立っており、「가다」をV2とする動詞結合は、例えば、「걸어서 가다/걸어서 천천히 가다」から分かるように、検討無しに「複合動詞」として認定することは注意を要するが、いずれにせよ、「를」による境界部の分離を許容している。(19)の例は、日本語の方では「取って行く/盗んで行く/借りて行く」のように訳され、これらは「複合動詞」と分類せず、「句」と処理するのが一般的であるが、このような場合でも境界部に「を」を挿入にして「*取ってを行く/*盗んでを行く/*借りてを行く」のようにすることは全くできない。

今まで調べた範囲ではこの相違点を指摘したものは見当たらないが、通常、格助詞と分類される「を」と「을(를)」が複合動詞の境界部を分離することができるか、という点において相違を見せるということは対照言語学的には非常に興味深い。本稿では、両者による境界部の分離可能性の可否しか指摘することができなかったが、「을(를)」による境界部の分離が他の「은(는)」「만」などによる分離より一般的ではない理由、また、当該の相違点を通して何が言えるのか、などに関してはより綿密な観察と分析を要する。このことに関しては今後の課題にしたい。

www.kci.go.kr

5. まとめ

本稿は、塚本(2009)が指摘した日韓語の複合動詞の相違点について批判的な立場から検討し、結果的に同氏の相違点とは異なる相違点を新たに提示したものである。まとめとして、塚本(2009)の相違点と本稿の相違点を以下に示す。

＜塚本(2009)の相違点＞

①日本語ではV2が自立性を失った複合動詞を比較的多く見出すことができるのに対して、韓国語にはV2が自立性を失った複合動詞が非常に少ない。

②日本語では統語的複合動詞を用いて表現することができる場合に、韓国語では複合動詞として成立することが認められない。

③日本語ではV2が様態を表す複合動詞を数多く見出すことができるのに対して、韓国語ではそういった複合動詞はなくはないが、非常に限られている。

④韓国語における統語的複合動詞が日本語においては「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式に対応して表現される。

⑤韓国語で複合動詞を用いて表現することができる場合に、日本語では「動詞連用形＋接続語尾「て」＋動詞」という形式で表現する必要があるものがかなりの割合で見受けられる。

⑥両言語ともに複合動詞としては成立するが、V1とV2が両言語でちょうど逆の順序になっている複合動詞が存在する。

⑦韓国語では語彙的意味が類似した動詞がV1とV2に入っている複合動詞が比較的に見出されるのに対して、日本語ではそういった複合動詞がなくはないが、非常に限られている。

＜本稿の相違点＞

①日韓語の複合動詞を網羅的に扱うために、V1の形式を「動詞語幹」という概念を適用して分析した場合、日本語の子音語幹動詞がV1に立つ時だけ登場する「－i」という特別な母音がある。

②複合動詞の形成に介在する要素が数の違いを見せる。日本語では｛－て/－で｝が介在し、韓国語では｛－아/－어/－여｝｛－고｝｛－아다/－어다｝が介在するので、1対3の相違があることになる。

③日本語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して、韓国語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素有りタイプ」の形で形成され、数という面で分布上における相違が見られる。

www.kci.go.kr

④対義語同士の結合が韓国語では「V＋V」型の複合動詞として実現されるのに対して、日本語では「N＋N」型の複合名詞として実現される。

⑤日本語の「を」は複合動詞の境界部を分離することができないのに対して、それに対応する韓国語の「을(를)」は複合動詞の境界部を分離することが可能な場合がある。

本稿では塚本(2009)とは異なる相違点を新たに指摘したが、塚本(2009)の相違点も併せて参考にすれば、日韓語の複合動詞についての理解をより深めることができると思われる。

今後の課題としては、①複合動詞を判別する基準をより明確に示すこと、②複合動詞は、句と補助動詞結合とは連続的な関係にあるものなので、この三者を「連続性」という観点から分析すること、③介在要素有りタイプの複合動詞における境界部の分離可能性、特に、韓国語の格助詞「을(를)」による境界部の分離可能性についてより詳細に分析すること、などが挙げられる。今後、さらなる観察と分析を通して、日韓語の複合動詞の本質を究明していきたい。

www.kci.go.kr

【参考文献】

김석득(1992)『우리말 형태론―말본론―』탑출판사
김창섭(1981)「現代国語의 複合動詞 研究」『国語研究』第47号 国語研究会
―――(1996)『국어의 단어형성과 단어구조 연구』국어학회
서정수(1992)『국어 문법의 연구 Ⅱ』한국문화사
이관규(2002)『개정판 학교 문법론』월인
최현배(1961)『우리말본』정음문화사
李忠奎(2008)「日韓語の複合動詞形成システムの相違―対義語同士の組み合わせを中心に―」『国語国文研究』第134号、1～17、北海道大学国語国文学会
―――(2009)「形態レベルからみた日韓語の動詞結合―「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析―」『日本語文学』第43輯、89～117、韓国日本語文学会
―――(2010a)「音韻レベルからみた日韓語の動詞結合―音韻現象の分析を通して―」『日本文化学報』第45輯、25～46、韓国日本文化学会
―――(2010b)「日韓語の動詞結合の形成過程と分類―「日韓語の動詞結合形成モデル」の構築を通して―」『日本文化学報』第47輯、83～100、韓国日本文化学会
―――(2011)「韓国語の動詞語幹の自立性について―日本語の動詞語幹の自立性との対照も兼ねて―」『日本語文学』第50輯、93～113、韓国日本語文学会
―――(2012)「日本語と韓国語における複合動詞の類似点―塚本(2009)の類似点の批判的な検討―」『韓国日本学会(KAJA)第84回学術大会Proceedings』26～31、韓国日本学会
生越直樹(1984)「日本語の複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的な語句との関係―日本語副詞指導の問題点―」『日本語教育』52号、55～64、日本語教育学会
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
塚本秀樹(2009)「日本語と朝鮮語における複合動詞再考―対照言語学からのアプローチ―」『油谷幸利先生還暦記念論文集　朝鮮半島のことばと社会』313～341、明石書店
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻　くろしお出版

www.kci.go.kr

要 旨

本稿では、塚本(2009)が指摘した日韓語の複合動詞の相違点について批判的な立場から検討し、結果的には塚本(2009)の相違点とは異なる相違点を新たに指摘した。その相違点とは次の五点である。

①日韓語の複合動詞を網羅的に扱うために、V1の形式を「動詞語幹」という概念を適用して分析した場合、日本語の子音語幹動詞がV1に立つ時だけ登場する「－i」という特別な母音がある。
②複合動詞の形成に介在する要素が数の違いを見せる。
③日本語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して、韓国語の複合動詞は、形態構造上、主に「介在要素有りタイプ」の形で形成され、数という面で分布上における相違が見られる。
④対義語同士の結合が韓国語では「V＋V」型の複合動詞として実現されるのに対して、日本語では「N＋N」型の複合名詞として実現される。
⑤日本語の「を」は複合動詞の境界部を分離することができないのに対して、それに対応する韓国語の「을(를)」は複合動詞の境界部を分離することが可能な場合がある。

塚本(2009)の相違点と本稿の相違点を併せて参考にすれば、日韓語の複合動詞についての理解をより深めることができると思われる。

キーワード：複合動詞、動詞連用形、動詞語幹、介在要素、境界部の分離可能性

投　　稿：2012. 5. 31
1차 심사：2012. 6. 16
2차 심사：2012. 7. 7

www.kci.go.kr